【併催】丹阿弥丹波子展　メゾチントからうかぶモノ

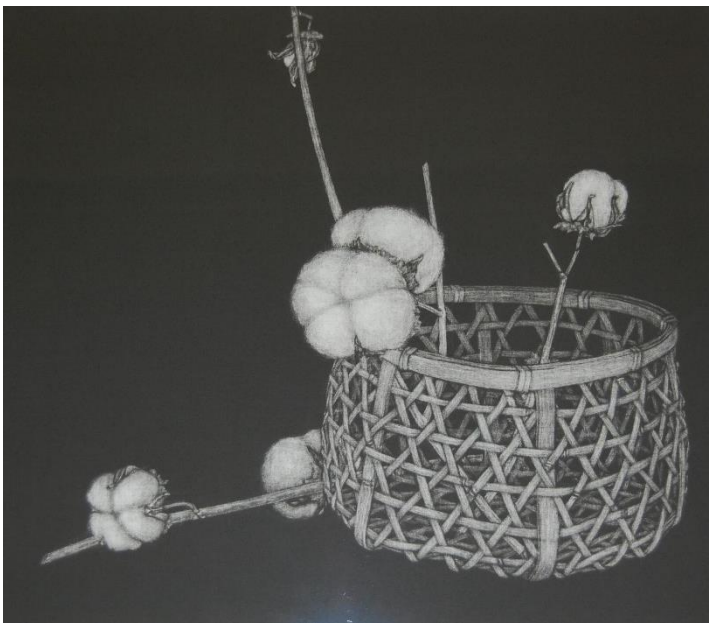
丹阿弥丹波子
（1927～）

1927 年日本画家の丹阿彌岩吉と氷上町出身の桐塑人形作家の母とみゑの次女として東京に生れました。30 代で長谷川潔の銅版画と出会い、東京神田の文房堂での銅版画講習会で駒井哲郎の指導を受け、銅版画の制作を始めました。メゾチントの作品を作ってからは、一貫してメゾチントの作品の制作に打ち込んでいます。

絵の中の自然

描くのは、年中そこらに咲いている、日常にある花で、「自分の生活の中に入り込んでいるから、出てきやすい」という。

「私は、写生のとおりに描いたことはほとんどない。(絵の中では、) コップに花が刺してあっても、(実際には) 絶対にそんなふうには刺さらない。絵の中で絵として安定していれば構図として安定する」と話す。



丹阿弥丹波子「わたの実」

メゾチントとは・・・

版画には、大きく分けて「凸版」、「平板」、「凹版」の３種類があります。銅版画は、その中の凹版です。凹版は、凹んだところにインクを詰め、平らなところのインクは拭き取ってプレスにかけて刷ります。この凹みが深かったり、密であったりすれば墨色は濃くなり、浅かったり、粗ければ墨色は薄くなります。

製版する方法には、「腐蝕」と「手彫り」の２通りがあり、メゾチントは手彫りの技法です。メゾチントは、綺麗に磨いた版に端から細かい穴を刻み込んでいきます。これが、最大の特徴で、版に疵（きず）をつけます。

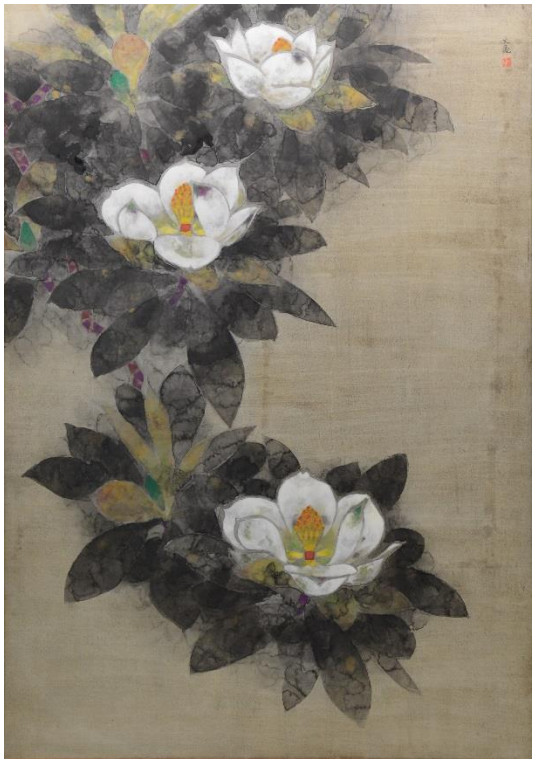
丹阿弥の場合、刃物で１センチ四方に２５０回から３００回位刻（ほ）っています。次に真っ黒に刻（ほ）れた版を刃物で削ったり磨いたりして、明るい部分や濃淡を作り出して、仕上げていきます。

左の作品「わたの実」位の大きさになると、製版だけで３、４ヶ月はかかるそうです。

郷土の現代日本画展

親子の系譜

山本茂斗萠「柏原町木之根橋と役場」



常岡文亀「泰山木」

中尾英武「放つ」

常岡幹彦「霞宵」

本展では、「親子」をテーマに丹波市ゆかりの日本画家2組を紹介しています。

父とは違う道を歩み、親子で大きく異なる画風の常岡文亀・幹彦父子。父と同じ画塾で日本画を学んだ山本茂斗萠・中尾英武父子。

ここでは、それぞれが歩んだ道や作品の特徴について紹介します。

また、日本画家の父を持ちながらメゾチント技法を得意とする銅版画家となった丹阿弥丹波子の作品の魅力を紹介します。

丹阿弥丹波子「くちなし」

丹波市立植野記念美術館

父　常岡文亀
（1898-1979）

1898 年柏原町上小倉に生れた常岡文亀は、1917 年東京美術学校（現：東京芸術大学）日本画科に首席で入学し、同校の特待生となりました。卒業後は、日本画壇における洋画派だった結城素明に師事し、洋風的リアリズムの花鳥画家として中央画壇で活躍しました。
1945 年には、同校教授になりました。

常岡文亀「花鳥図」

常岡文亀の表現力

日本画の伝統技法を重視しながらも西洋画の写実を巧みに取り入れ、新しい表現力を持たせた装飾的な花鳥画を追及しました。
花鳥画に「金泥（きんでい・注１）のリアリズム」と評される神秘的な描写による画風を作り出しました。

（注 1）純粋もしくはそれに近い金・銀を粉末状にして、膠（にかわ）が入った水で溶かした絵具のこと。

子　常岡幹彦
（1930-2015）

常岡幹彦は、1930 年に文亀の長男として、柏原町上小倉に生れました。父文亀と同じく東京芸術大学で日本画を学び、卒業の年に日展に初入選しました。以降１４回入選しましたが、1972 年以降、日展作家としての道を振り切って、独自の画風をめざして独立をして、活動の場をより広く求めていきました。

常岡幹彦の作画姿勢

「花鳥だと父を一生こえることができないと風景に徹することにした。最後は、絵の具を使わないで、白は紙の白、色は墨一色。それで７、８年から１０年積み重ねていけたらと思う。
しかし、単なる墨絵なら描かない方がよい。昔からの絵をただ踏襲するだけなら意味がない。」と語る。
この作品からは、水墨画にも似たモノクロームに近い色彩を用い、独自の画境で雄大な自然と生命感あふれる風景画の世界が感じられます。

常岡幹彦「北濤」

父　山本茂斗萠
（1902-1985）

1902 年東京に生れ、1927 年に東京美術学校（現：東京芸術大学）日本画科本科を次席で卒業しました。
1928 年兵庫県立柏原高等学校の前身である兵庫県立柏原中学校に勤務し、一度の転勤もなく定年まで、兵庫県立柏原高等学校で教鞭をとり続けました。

東丘社生え抜きの作家

兵庫県立柏原高等学校では、美術部顧とマリオネット班の顧問をし、特にマリオネット班は郡内を公演、ＮＨＫラジオ放送で取り上げられました。
美術部は、郡部としては珍しく多くの人を美術系の学校に送り出しており、それらの人は、作家や美術教師として活躍しています。
そのかたわら、堂本印象画塾・東丘社に自らの研鑽の場を求めて入塾し、昭和 13 年の第 1 回東丘社展から第 42 回展まで連続して出品し、東丘社生え抜きの作家でもあります。

山本茂斗萠「弥撒」

中尾英武「薄暮」

子　中尾英武
（1943-2021）

1943 年氷上郡柏原町に生れ、1967 年京都市立美術大学（現：京都市立芸術大学）日本画科を卒業後、独特の社会風俗画や障壁画などで多彩に活躍した日本画家・堂本印象が主宰した画塾・東丘社で日本画を学びました。

丹波市の芸術振興に尽くす

師・印象の画風を受け継いだような当世風の女性像や、静物と女性のモンタージュ的構図を得意とし、日展で入選を重ねるとともに、風景画も数多く描いています。
父である山本茂斗萠に続いて、故郷の丹波市で美術文化の振興にも尽くしています。